

## 明治初期の戯作の動向（II） —〈実〉という価値観をめぐる—

人間社会環境研究科 客員研究員

三 川 智 央

### 要旨

明治初期の戯作界を語る際に、以前から注目されてきたのが、明治五年に仮名垣魯文と条野伝平が連名で教部省へ提出したとされる上申書の存在である。柳田泉を始めとする従来の研究者は、この上申書を、戯作者たちが三条の教則を基本とする国教宣伝運動への協力を誓ったものとしてとらえ、これを機に、彼らの作風が〈虚〉から〈実〉へ一変したという解釈を行ってきた。しかし、それは本当に当時の実態を正しくとらえたものと言えるのかどうか。本稿では、上申書がどのような状況の中で作成されたのかを、より客観的な史料をもとに究明するとともに、当時の戯作の動向に深く関わった〈実〉という価値観が、具体的にはどのようなものであり、どのように生み出されたのかについて検証を行う。

### キーワード

明治、戯作、仮名垣魯文、条野伝平

## Trend of Light Fiction Written in the Early Period of the Meiji Era (II)

MIKAWA Tomohisa

### Abstract

Researchers of light fiction, written in the early periods of the Meiji era, have paid close attention to the written opinions submitted to the Ministry of Religious Education by Kanagaki Robun and Jono Denbei in 1872. Researchers, such as Yanagida Izumi, were of the opinion that this report showed that low-class novelists promised to cooperate with the government's campaign to propagate the state religion based on *Sanjo no Kyosoku* (three principals of the Meiji government for propagation of the state religion). They also believed that the novelists had changed their topics from *kyo*, or fantasy, to *jitsu*, or matters in the real world. However, I am in doubt as to whether this was actually true. In this paper, based on objective historical materials, I would like to verify the situation in which this report was made. I would also like to examine the concept of *jitsu* as it deeply affected the trend of light fiction during the Meiji era. Furthermore, I hope to gain an understanding of how this concept was brought into the world of light fiction.

### Keywords

Meiji, light fiction, Kanagaki Robun, Jono Denbei

## 1

前号に掲載した「明治初期の戯作の動向（Ⅰ）—仮名垣魯文・条野伝平による教部省への上申書をめぐる考察—」<sup>1)</sup>では、魯文たちが上申書を作成した当時の戯作界の状況について詳しく考察を行った。上申書の文面は、教部省からの下問に応じた単なる答申に終わらず、「教則三条ノ御趣旨」に基づいた著作活動を謳うことによって他の芸能活動との差異を強調したものになっており、彼ら（特に魯文）にとっては、上申書提出が、自分たちの存在意義を改めて世間に広くアピールし、明治の新社会の中で何とか戯作の位置を確保しようとするための戦略的な意味を担っていたことを明らかにしたつもりである。本編では、そのことを踏まえた上で、視点を三条の教則と戯作者との関係に移し、その後の彼らの著述を支配することとなる〈実〉という価値観が、具体的にはどのような性質のもので、どのように生み出されたのかについて考察を続けることとする。

既に触れたように<sup>2)</sup>、「敬神愛國ノ旨ヲ體スヘキ事」「天理人道ヲ明ニスヘキ事」「皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事」の三条から成る教則は、明治五年四月二十八日に教部省から教導職に向けて通達された。教導職とは、明治五年四月二十五日の太政官布告（第百三十二号）により、教部省の管轄として設置されたもので、同年六月九日の教部省から各府県への布達（第三号）に、「今般教導職設置候ニ付テハ兼テ被 仰出候三ヶ條ノ大旨ヲ體認シ各管轄内社寺ニ於テ追々説教可執行候條其管内老幼男女共稼業ノ餘暇ヲ以テ信仰ノ社寺ニ詣り聽聞可致旨一般末々迄無遺漏布達可有之候」とあることからわかるように、各地の神社または寺院において庶民を対象に説教を行うことを任務とする、言わば、教部省が推進する民衆教化の直接の担い手であった。そして、その民衆教化の根本理念として、教部省によって定められたのが、この三条の教則である。

本稿の冒頭では<sup>3)</sup>、三条の教則をきっかけに、戯作の作風が「虚を主にした」ものから「実を主

にし、虚を客とするというやり方」に一変したとする柳田の解釈<sup>4)</sup>を紹介したが、この認識は、現在の文学研究においてもそのままの形で踏襲されていると言ってよい。例えば、山田俊治は最近の論文「『小説』の十九世紀」（平成二十一年）の中で、魯文たちの上申書を取り上げ、「『従来ノ作風ヲ一変シ乍恐教則三条ノ御趣旨ニモトツキ著作可仕ト商議決定仕候』と、虚構から事実への変質を宣言するのだった」とし、三条の教則を受け入れたことで、戯作が「虚構から事実へ」変質したという記述を、何の疑問もなく行っている<sup>5)</sup>。しかし、「敬神愛國ノ旨ヲ體スヘキ事」「天理人道ヲ明ニスヘキ事」「皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事」という教則の文言を眺める限りにおいては、そこに〈実〉あるいは〈事実〉に結び付く要素を見出すことは難しいように思う。はたして三条の教則の「御趣旨」の中に、〈実〉に結び付く価値観は含まれていたのだろうか。

この点を明らかにするためには、三条の教則が当時の社会においてどのように敷衍されていたのかを、具体的に調べる必要があるようである。まずは、教導職によって実際に行われた説教の内容を、小笠原正道『大教院の研究—明治初期宗教行政の展開と挫折』（平成十六年）<sup>6)</sup>の中から拾ってみたい。教導職による説教活動が全国的に開始されたのは、先程も触れた明治五年六月九日の教部省布達第三号が出されてからのことだが、小笠原によると、明治五年五月八日、教部省は東京府に対して同月十日からの説教開始を促す布達を出し、それを受けて東京府も翌九日、町触れを出して説教開始を公示したため、東京府では全国布達に一ヶ月も先駆けて、明治五年五月十日から教導職による説教が開始されたようである。小笠原の同書には、「三島通庸関係文書」（国立国会図書館憲政資料室蔵）所収の資料から、この五月に実施された説教の記録が引用されているのだが、その中の神田明神社で行われた説教の記録には、次のような記載がある。

神前ニテ敬神愛國ノ旨ヲ體シ天理人道ヲ明ニシ

皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵奉セシムヘキノ条ヲ読  
和シ其後講座ニ着テ右三ヶ条ノ注意ヲ説教ス第  
一敬神愛国ノ意ヲ注解スルニ依テ天地開闢以來  
神代ヨリ今日ニ至ル所ノ沿革亦大原ニ於テハ一  
定不易タルヲ示シ而シテ 皇上ヲ尊敬シ朝旨ヲ  
遵奉スヘキ旨ヲ説教シ統テ天理人道ヲ告諭スル  
ニ至テ或ハ各将或ハ良忠之臣亦ハ義士勇士ノ伝  
ヲ引キ賤輩ニ解シ安ク又婦女子ニ分リヤスク目  
前日用之事ニ譬ヘ折ニハ笑ヲ含ミ退屈セサルヤ  
ウ心ヲ用ヒテ懇諭スルノ意アリ

「敬神愛国」の解説に「天地開闢以來神代ヨリ今  
日ニ至ル所ノ沿革」や「大原ニ於テハ一定不易タ  
ル」ことを述べて、「皇上ヲ尊敬シ朝旨ヲ遵奉スヘ  
キ」ことに結び付け、「天理人道」を「各将或ハ良  
忠之臣亦ハ義士勇士ノ伝ヲ引キ」ながら説明した  
ということだが、そこから読み取れるのは、いわ  
ゆる皇国史観的な認識に基づく道德意識を庶民の  
中に育もうとする態度であり、合理的な〈事実〉  
への価値観を喚起するような内容は見当たらない。

また、同書の中で小笠原は、明治六年六月に設  
置された大教院における説教の内容を、『教院講  
録』（東京大学明治新聞雑誌文庫蔵）から引用して  
紹介している。大教院は、「当初教導職の育成を  
主たる目的として設置申請され、これを許可され  
た」が、設置後の業務には、「当初の目標たる教導  
職の育成に加えて、神殿儀式や説教が盛り込ま  
れ、さらに教部省の監督の下、中小教院や講社を  
総括すること」までが含まれ、「全国の民衆教化本  
部としての性格」を持つようになっていた。「大教  
院での説教は明治六年六月の開院からはじめら  
れ、「大教院規則」第九条によって、毎月十六日に  
定期的に開催されることとなった」そうだが、そ  
の説教の内容を記録したものが『教院講録』であ  
る。小笠原の前掲書<sup>7)</sup>から、関係部分を引用して  
みる。

明治六年六月十七日の開講式においては、出羽  
神社宮司の西川須賀雄（権大講義）が「敬神ト

ハ信実ノ心ヲ以テ神様ヲ尊敬シ奉ルコト」「愛  
国トハ国ヲ可愛ク思フコト」「天理トハ人道ノ  
本体」「人道ハ天理ノ人ノ上ニ顯ハル々所」など  
として三条教則を逐条解説した（中略）また同  
年九月頃の説教では、中講義神谷大周が、「三  
条ノ御教憲ヲ考ヘマスルニコレハ勸善懲惡ノ綱  
領デ有ツテ天下ニ一日モ無クテハカナハザルモ  
ノ」として、歴代天皇による親征の故事を列挙  
し、我々も「神等ノ定メ給ヘル条理」に従って  
行動し、「開化ノ進歩ヲ翼ケ皇威ヲ海外ニカ々  
ヤカスベキ一助」となるべきだと説いている。  
（中略）翌七年三月頃には、教導職試補久保惠鄰  
が造化三神による天地創造の故事を解説した上  
で、「天理ニ背カズ人道ニ違ハヌヤウニ致セバ  
其ノ徳ガ終ニハ神明ト同体ニナルコトモ出来  
ル」と説いている。同年七月頃の説教でも、西  
川須賀雄が、これも三神による万物創造を説い  
て、「神ト人ハ其尊卑大小ノ違ヒコソアレ雖形  
ニ於テ聊以テカハルコトハアリマセヌ」として、  
その人間が親子朋友間に不和など起こせば、  
「邪神ニツケ込マレタノデアル」、官も農工商も  
天子の土地に住み、その禄を受け、その土地を  
耕し、その物を売買するのであるから、「同心協  
力致シ世ノ為人ノ為又我ノ為ニ勤ムル」ことが  
重要であると述べている。十一月頃の説教でも  
鹿島神宮禰宜の奉島常敏（中講義）が、神が天  
地を作り、「人ニ誠ノ道ヲ踏マセテ行住坐臥ニ  
善キ事ヲ勤メ行ハセタイト思召サレ」たのだから、  
人たる者は「正シク直ク人タルノ道ヲ勤メ  
行ハネバナラヌ」と説いていた。

これを見ると、共通して説かれているのは、や  
はり「天理」に適った道德的な生活を行うことの  
重要性であり、その「天理」が、あくまで造化三  
神による天地創造の故事によって解説されるよう  
な「神等ノ定メ給ヘル条理」である以上、むしろ  
それは〈事実〉とはまったく逆の指向性を持つ思  
想であったと言わざるを得ない。

次に確認すべきは、三条の教則に関する衍義書  
類である。三条の教則の衍義書は、刊行されたも

のだけでもかなりの種類があったようだが、ここではその代表格として、当時権少教正であった田中頼庸が執筆し、「衍義書のなかで最も正統とされ、かつ神道界は勿論のこと、仏教界においても批判する意味でも広く読まれた」と評される<sup>8)</sup>『三條演義』(明治六年四月)<sup>9)</sup>を取り上げることにする。

それによると、まず、「敬神愛國ノ旨ヲ體スヘキ事」については、「神を敬し、祭を慎しむは、国を治るの要道にして、皇祖天神の詔を以て天下万世の法と定給へる皇政の大本」であり、「天下の臣民も神と皇との恩頼を蒙る所なれば、深く此旨を体して、専ら皇祖天神及び産土神を尊敬して、水旱を除き豊熟を禱るべし」と記され、「天下の人民は、各吾祖先より職を継ぎ業を承て、神皇の歴世仕来れる開闢以来の臣子なれば、百官士夫より億兆万民に至るまで最能く此理を弁へて、各相生養するの道を尽し、其君父の国を愛して、天地日月と共に一系の皇統を吾大君と仰ぎ奉るべきこと、天祖天神の定め給へる万古不易の国体なる事を講明すべし」と解説されている。また、「天理人道ヲ明ニスヘキ事」については、「天理とは造化の神理にして、宇宙の万物悉く此理を具へざるはな」く、「殊に人は万物の靈長なれば、吾に具へたる神賦の理の任に踏行ふ所を指て人道とは謂なり」とした上で、「抑君臣父子夫婦朋友は人道の最大なるものなるが、君臣の始は大初の際に天照大神の詔を以て皇孫尊を天皇の御位に即奉りて」「天下の大君と定給ひし」ことによるのであり、「公卿百官より士民に至るまで、天下万世各其祖の志を継ぎ、其家の職を主として一向に天皇を仰て忠誠を尽すべきなり」と説かれる。そして最後に、「皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事」については、「皇上とは、天照大神の御正統の大君」であり、「朝旨とは朝廷より出る詔旨にして、即ち天神の御心を御心として国土を經營し人民を撫育し給ふ」ものなので、「朝旨を遵守するは、皇上を奉戴する所にして、神明を敬する所なり」と記される。

ここでもやはり、「天理」は客観的な〈真理〉に通じるものではなく、あくまで「神理」として認

識され、それはそのまま天皇への忠誠を始めとする「君臣父子夫婦朋友」の間の道徳として説明されている。つまり、衍義書の中にも、〈事実〉に価値を見出そうとするような姿勢は、まったく見受けられないのである。

## 2

以上のことから明らかなように、三条の教則の「御趣旨」の中には、〈実〉あるいは〈事実〉に結び付くような要素は見当たらない。ちなみに、魯文自身の著作の中にも、三条の教則の庶民向けの衍義書とも言える『三則教の捷徑』(明治六年七月刊)<sup>10)</sup>が存在する。これは、その「自叙」に「活業なりはひの繁しげく間なく説教せつこうの場ばに臨はむを得ざる徒ありと傳つたへ聞きからに余幸さいはひに聴聞でうもん數度あまたいびにして耳みみに止とどめたる三ツの則のりを我も人も能く口訓くちなれたる俗言さびごともてかき列つらね」とある通り、仕事に忙しい庶民のために七五調の親しみやすい形式で三条の教則の趣旨を綴ったというもののだが、その中身は、『三條演義』などの衍義書と何ら変わりはない。つまり、上申書作成から『三則教の捷徑』の刊行までには一年程度の時間の経過があるとは言えるものの、魯文自身が明治五年の時点で三条の教則の趣旨を取り違えていたとも考え難い。

では、魯文たちの上申書の中の「尔後従来ノ作風ヲ一變シテ恐教則三条ノ御趣旨ニモトツキ著作可レ仕」との決意は、何を意味するものなのか。ここで改めて『新聞雑誌』第五十二号に掲載された上申書の文面を眺めてみると、私たちはこれまで単純な読み間違いをしてきたのではないかということに気付かされる。すなわち、本来、上申書の文面が示しているのは、「従来ノ作風ヲ一變」した後、その結果として「教則三条ノ御趣旨ニモトツキ著作」を行うという内容であったにも関わらず、従来の研究者たちは、戯作者たちが「作風ヲ一變」させなければならなかった要因そのものが「教則三条ノ御趣旨」にあったかのように受け取ってしまっていたということである。確かに魯文たちは、この上申書の中で、「虚ヲ主トシ實ヲ客

トシ或ハ事跡名籍ヲ<sup>カリモチヒ</sup>假用シ或ハ正史ヲ<sup>カンコツツツタイ</sup>換骨奪鉢シ、「京師ヲ鎌倉ニ模擬シ其事柄ハ元禄以内ニシテ其名籍ハ元弘建武ノ如キ」「迂遠ニ<sup>アイマイ</sup>陥イリ曖昧ニ流ル、而已ナラス其弊ツイニ人ヲ過ツニ至ル」ような「従来ノ作風」を捨て去り、その後は「教則三条ノ御趣旨ニモトツキ著作」することを宣言している。しかし、冷静に読めば、そのような決意を促したものの自体が三条の教則だったとは記されていないのである。

おそらく、こうした誤解は、この上申書を、政府からの国教宣伝運動への協力の呼びかけに応じたものと不用意に決めつけてしまったことから生じている。そもそも、柳田の『明治初期の文学思想』での解釈<sup>11)</sup>がそうであったように、私たちは従来、魯文たちが教部省に上申書を提出した背景には、三条の教則に基づく民衆教化運動に「文学演劇などの力」を利用しようとする政府の積極的な働きかけがあったと考えてきた。しかし、本稿で既に明らかにしたように<sup>12)</sup>、実際には、明治五年の時点において、歌舞伎界や戯作界に対する政府の対応にそのような動きは認められなかった。同じことの繰り返しになるが、その当時、教部省から各界の関係者に対して行われた指導は、あくまで風俗改良に関わるものだったはずであり、その中に、人々に歴史的事実を間違えて認識させるような「狂言綺語」や「妄語」の禁止は含まれていたものの、それらは三条の教則とは特に関係なく指導されたと考えられる。従って、魯文たちが「従来ノ作風」を捨て去ることを決意したのは、風俗改良及び「妄語」の廃止という社会的要請に応じたためであって、このこと自体に三条の教則は関係していなかったと解釈することができる。そして、おそらくは、そのように「従来ノ作風」を捨て去る方向を選択した彼らが、戯作で扱うべき新たな題材としてたまたま目を付けたのが、ほかでもない三条の教則であった。当時、既に魯文は、際物作家としての本領を発揮し、開始されたばかりの教導職による説教を戯画化した『大洋新話 蛸入道魚説教』の初編を明治五年六月に刊行していた<sup>13)</sup>。時流に迎合することで戯作の居場所

を探そうと試みたのだろうが、この『大洋新話 蛸入道魚説教』の刊行と相まって、教部省への上申書の中に三条の教則を盛り込むことにより、より一層戯作の存在意義を世間にアピールしようとしたわけである。

では、その戦略はいかなる結果を招いたのか。『大洋新話 蛸入道魚説教』について言えば、予定されていた第二、三編が刊行されなかったことから考えても、世間の評判は今ひとつであったものと推測できる。しかし、魯文が示した三条の教則に対する前向きな態度は、その後、新たな展開を生むこととなる。それが、魯文の教部省出仕と、『三則教の捷徑』の刊行である。先程私は、明治五年の時点で、政府には、三条の教則に基づく民衆教化運動に「文学演劇などの力」を利用しようとする意識はなかったことを再確認した。しかし、その後、明治五年十一月に三島通庸が教部大丞に就任すると、政府の方針に明らかな変化が現れてくる。この点について、谷川穰「教部省教化政策の転回と挫折—「教育と宗教の分離」を中心として—」（平成十二年）には、次のような記述がある<sup>14)</sup>。

文部省による併吞を免れた教部省は、教化活動に関してさかんに具体的な政策をうちだす。その牽引役は、五年十一月二五日に教部大丞に就任した三島通庸であった。（中略）／三島は東京府参事時代から、教化活動に力を注いでいた。東京府では、五年五月一〇日に全国に先駆けて神田明神など三か所で説教が実施され、以後各寺社で次々と開催されていく。『三島通庸関係文書』には、当時東京府内五か所で行われた説教の様子を記した、貴重な記録が残っている。（中略）この記録に注目すれば、東京府参事時代の三島は、教導職の態度や話術の改善、三条教則に即した教化内容の統一といった課題を見いだしていたことがうかがえる。／こうした三島の知見は、教部入省後、諸政策に如実に反映されてゆく。第一に、説教技術が巧みで、聴衆動員力のある人材を教導職に推挙する方策で

ある。六年二月一〇日、教部省は「神官僧侶ニ不限三条之綱領ニ基キ布教筋有志之者有之候ハ、一般ニ教導職ニ可補候」と布達し（同省達一〇号）、九代目市川団十郎、三遊亭円朝らが任命される。（中略）／さらに、教化内容は民衆にどう伝えアピールするか、その手段も模索される。これは、三島の動きから明瞭に読みとれる。六年二月、三島は神奈川県参事に対し、当代屈指の人気戯作者であった仮名垣魯文（当時神奈川県職員兼務）を教部省へ約一週間出仕させ、「作文」させたいと申し入れた。もともと魯文は、五年七月に教部省に三条教則に沿って著作する旨の宣言書を提出しており、三島はそこに目をつけ、魯文の意欲と知名度を利用しようとしたのである。魯文の教部省出仕は実現し、その「作文」は六年二月二〇日脱稿、『三則教の捷徑』と題して同年七月に出版された。

政府が神官・僧侶以外の一般人にまで教導の担い手を広げたのは、三島の入省後、明治六年二月十日に教部省から各府県に対して出された布達第十号（「神官僧侶ニ不限三條之綱領ニ基キ布教筋有志之者有之候ハ、一般ニ教導職ニ可補候條各地方官ニ於テ人材取糾シ相當ノ等級ヲ以薦舉可申出此旨相達候事」）による。谷川が指摘する通り、『植村正久と其の時代』第二卷（昭和十三年）には、「此等の教導職の中には、市川團十郎の權大講義、三遊亭圓朝の中講義、其角堂、夜雪庵に至る迄それぞれこれに任ぜらるるといふ奇觀を呈した」との記載があり<sup>15)</sup>、おそらくはこの布達第十号によるものと思われる。魯文の教部省出仕と「作文」の件について、谷川は国立国会図書館所蔵の『社寺取調類纂』を根拠としている。『三則教の捷徑』は、田中の『三條演義』と同じく「中西源八藏版」となっており<sup>16)</sup>、刊行に際しても教部省が深く関わっていたことが窺われる。また、魯文自身、その「自叙」の末尾には「物の本かき／假名垣魯文誌」、本文の末尾には「稗官／假名垣魯文謹述」と記しており<sup>17)</sup>、彼にとっても『三則教の捷徑』が、戯作とは別の公的な著作物として意識されていた

ことがわかる。もともと、魯文が上申書の中で三条の教則に基づく著作を宣言したのは、新社会の中で戯作の居場所を確保するための方策としてであった。しかし、その結果、彼にもたらされたのは、如何せん、戯作者とは別の文字通り「稗官」としての役割であったと言える。

### 3

教部省への上申書に名を連ねた二名の戯作者、仮名垣魯文と条野伝平の、明治五年から六年にかけての動きを見ると、条野は既に明治五年二月の時点で新聞界へ活動の中心を移しており<sup>18)</sup>、また、魯文にしても、『三則教の捷徑』に見られたように、結果として、その著作は明らかに戯作から遠のいている。この当時、彼らのこうした動きを直接あるいは間接に支配していたものは、いったいどのような価値観だったのか。結論から先に言えば、やはりそれは、〈実〉という価値観であったと思われる。しかし、この時点での〈実〉の正体は、〈事実〉という概念とは異なる、〈実用〉もしくは〈有用〉〈有益〉とでも言うべき性質を強く帯びたものであったと考えられる。

もともと、明治五年の時点で、政府からの指導に〈事実〉を求める向きがなかったわけでは決してない。既に触れたように<sup>19)</sup>、明治五年四月、第一大区役所に歌舞伎の守田座関係者が呼び出された際には、「羽柴秀吉を真柴久吉とす」のような「狂言綺語」が注意され、「都て事実<sup>カリモチ</sup>に反すべからず」という指導を受けている。おそらくは、同年五月、教部省に魯文と条野が呼び出された際にも、戯作に対して同様の指導が行われたと推測できる。だからこそ、魯文たちが作成した上申書の中にも、「虚ヲ主トシ實ヲ客トシ或ハ事跡名籍ヲ<sup>カリモチ</sup>假用シ或ハ正史ヲ<sup>カンコツタツク</sup>換骨奪軀シ」、「京師ヲ鎌倉ニ模擬シ其事柄ハ元禄以内ニシテ其名籍ハ元弘建武ノ如キ」「從來ノ作風」を捨て去ることが明記されたわけである。しかし、ここで政府が言うところの「事実」とは、現実世界の客観的な出来事を意味するだけではなく、社会に有用な正しい知識や

道徳意識といった意味を多分に含んで用いられていることに注意しなければならない。明治五年四月の第一大区役所における指導でも、「抑演劇の儀ハ勸懲を旨となすべきハ勿論」として、まず道徳に反しないことを大前提とした上で、「強ち堅きを是として洒落を非とするにもあらず淫哇滑稽にも又教となるべきあれハ能是等を注意」するようにと述べ、庶民の教化という実用性や有用性が強調されている。また、前にも取り上げた通り<sup>20)</sup>、明治四年七月、太政官大史から京都府へ「新聞紙雑誌發行ニ關スル條例書ヲ設ケタル旨」を伝えた通知では、新聞紙が「内外ヲ問ハス所有ノ事實ヲ記」すもので、「新聞紙ヲ選スルハ一部ノ正史ヲ作ルト見做スヘシ然ルトキハ率易妄誕ノ患少シ」としながらも、その「事實」はあくまで「人ノ知識ヲ啓開」し「文明開化ノ域ニ導カントスル」ためのものであり、記述の方法についても、「亦一部ノ稗官小説ヲ作ルト見做スヘシ然ラサレハ方正板實ニ過キテ里巷ノ耳目ニ適シ難シ、新聞紙ヲ選スルハ務メテ讀者ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス」と記され、「事實ヲ記」すことと同時に、庶民にとっての実用性、有益性といった点を念頭に置くことが重要視されていた。

このような〈実用〉〈有用〉〈有益〉といった概念は、明治初年代の新社会を牽引する重要な価値観として、急速に人々の間に広まりつつあったと言える。明治三年から四年にかけて刊行された『西國立志編』が、西洋の偉人の成功譚を綴る中で、「有用ノ學問」「有用ノ學科」に精進することの大切さを繰り返し説いていたことは既に述べた通りだが<sup>21)</sup>、明治五年二月に刊行された福澤諭吉の『學問のすゝめ』(初編)<sup>22)</sup>は、さらにこの価値観を「實學」という言葉で人々に示していた。

學問とハ唯むつかしき字を知り解し難き古文を讀み和歌を樂ミ詩を作るなど世上に實のなき文學をいふにあらずこれ等の文學も自から人の心を悦ばしめ随分調法なるものなれども古來世間の儒者和學者などの申すやうさまであがめ貴むべきものにあらず(中略)されハ今斯る實なき

學問ハ先づ次にし専ら勤むべきハ人間普通日用に近き實學なり

そして、『學問のすゝめ』に示された「實學」重視の思潮は、明治五年八月二日に太政官から発せられた布告第二百十四号、いわゆる「學制」序文の次のような文面へも受け継がれ、普く国民に流布することとなる。

士人以上ノ稀ニ學フ者モ動モスレハ國家の爲ニスト唱ヘ身ヲ立ルノ基タルヲ知ラスシテ或ハ詞章記誦ノ末ニ趨リ空理虛談ノ途ニ陥リ其論高尚ニ似タリト雖トモ之ヲ身ニ行ヒ事ニ施スコト能ハサルモノ少カラス

では、こうした社会風潮の中、戯作者としての魯文自身においては、〈実用〉〈有用〉〈有益〉といった価値観が、いつ頃から重要なものとして意識されていたのか。彼の著述に、それを確認してみることしよう。まず、明治三年刊行の『萬國航海西洋道中膝栗毛』初編を見てみると、冒頭の「凡例」<sup>23)</sup>の中で、彼は次のように述べている。

僕が文盲なる書ハ草冊子の外を讀ず何ぞ學ばん  
異邦の事情然れども文物盛典の徳たる近世福澤  
先生を始め諸々の洋學先生が著述されし翻譯の  
書とほしからねバその階梯にとりつきて大略お  
茶を濁すものなり杜撰漏ハ稗官者流の性來な  
れバ必ずしも論じて意中をそこね給ふな耻書こ  
とを平常とすれば耻と思ふ事ハあらじ嗚呼自己  
ながら達者なる哉

自らの作を「翻譯の書」の「階梯にとりつきて大略お茶を濁すもの」とし、さらに、そうした自らの態度を「自己ながら達者なる哉」と茶化すあたりは、謙遜ととらえるよりも、むしろ、戯作者としての本意がストレートに表現されていると考えた方が妥当であろう。この時点では、読者に有益な知識を提供しようとする意識はまだ薄く、当時、知識人の間に広がっていた福澤諭吉などの

「飢餓の書」にあやかりつつ、世間一般の西洋ブームに便乗して戯作の筆を振るおうとする意識の方が強かったものと思われる。また、「明治第五壬申孟春」（明治五年一月）と記された『河童相傳 胡瓜遣』初編の「自序」<sup>24)</sup>に至っても、その意識はほとんど変化していない。

此小冊子胡瓜遣と題する故縁ハ福澤先生の窮理  
 圖解世に高評の音通を假用し實学有益の確論を  
 無用の戲編に翻案せる其條河童の尻に等類く  
 一度水中に響くと雖水上に浮む則バ淡となり  
 て消るに同じ（中略）原書に同音字題号ハあれ  
 ども理窮たる説もなく蒙を訓く圖解もなし故  
 に河童の傳習とし一名絲瓜の皮とも号り

自らの著作が、「實学有益」の書である福澤の『訓蒙 窮理圖解』（明治元年刊）をパロディー化した「無用の戲編」であることを憚りなく、むしろ痛快に宣言したものととらえることができる。ところが、同じく明治五年一月の刊行とされる『倭國字西洋文庫』<sup>25)</sup>では、様相は大幅異なっている。その初編の序文では、「茲に著す西洋文庫ハ。幼学初心の階梯と。なれる迄にハいたらずとも。都獨逸甚九の唄本を。讀にハ遙に勝なるべし」と語られ、さらに「凡例ならびにおほむね」では、

- 此さうしハ吾友英國通弁鏡舟河丈紀なる人英の画工ワクマンといへるもの、一夕話なるよしにてかたれるまゝにそをたねとしてあらたにつくりまうけたりワクマンのはなしもとづくとところなきにあらねどもふにかのくにの小説なればかならずしも実録とおもふはたがへり
- 一世ナポレオンの一代記すでに世に流布することひさししかれどもこのさうしの趣きこととなるところあるハもとよりかの土のつくりもののかたりなればなるべしさハあれむげにたねなきことにハあらじ

と記される。この合巻が、「英の画工ワクマンと

いへるもの」の話をもとに書かれた架空の物語であり、「実録」ではないことを明らかにした上で、そうは言うものの、まったく根拠のない話でもなかろうから、「幼学初心の階梯」とまではならずとも、「都獨逸甚九の唄本」を読むよりは役に立つだろうと述べる態度には、それが単なる売り文句であつたとしても、社会における有用性といったものへの意識を感じ取ることができる。そして、この意識は、明治五年六月刊行の『大洋新話 蛸入道魚説教』の「凡例」<sup>26)</sup>になると、

一此小冊史僕が例の筆頭に成る一時の戯作と雖看官の注意に因て又開化の一端を踏むに至らん文章の卑俗きハ田童野婦に解讀易からんを要とすればなり

一無用の書を著述して有用を補全ふハ僕輩の是とする所贅語中自然微意あり稗史の卑きを捨てざる具眼ハ更に開化の得意たり

というように、自らの著作を「無用の書」とはしながらも、「有用を補全ふ」ものとして位置付けるなど、より切実さを帯びたものに変化し、さらに、「明治第五壬申仲冬／金港寄留」と記された『通俗窮理話』（初編二冊のみ刊行）の「自序」<sup>27)</sup>においては、

近來西哲の發明日に新にして往古の理ハ空となり。其實地に涉り。其確證を得ざれば。理の理たる由縁とせず。此書也彼洋史に所謂。「リードル」に等しく。婦幼をして耳近き窮理を。主客の問答に饒案し。以て知識を弘むるの一端とせり。其回話専ら俚語諺説を主とする者は則ち訓蒙の要務にして。更に文飾雅調に疎きは。編者が注意の基本なり。世の錦繡家しばし嘲笑を閉よ

と述べ、訓蒙的な傾向をいっそう強めている。

こうして見てくると、〈実用〉もしくは〈有用〉〈有益〉といった価値観に関心を持ちながらも、それを本気で自らの著作に持ち込むまでには至らな



かった魯文の意識が変化したのは、やはり明治五年五月の教部省からの呼び出しを境にしてではないかと思われる。ただし、この点について誤解のないように書き添えておかなければ、魯文が有用性を意識した著述を行った時期は、実は江戸期においても存在した。その際の著作が、いずれも文久元(一八六一)年に刊行された『萬國人物圖繪』と『童繪解萬國噺』の二作である。前者『萬國人物圖繪』は、イギリス、ロシア、アメリカ、フランス、清(中国)についての簡単な解説の後に、各国の歴史上の人物の伝記を綴ったもので、初編とそれに続く二編とから成るが、二編の冒頭には「毎編引書」として典拠となった書物が明示されとともに、筆者自身による次のような文章(「文久改元/辛酉初夏」)が掲載されている<sup>28)</sup>。

周に犬戎あり。漢に匈奴あり。中華代々の  
 國主。胡虜を憂ひて防禦の術なし。そが中に。  
 我神洲の武威。遠く四夷八蠻に輝き。海中獨立  
 億萬歳。外蕃入貢して以て恩澤に浴す。豈他  
 邦と等しからんや。是に於て海外の珍書。異境  
 の奇史。架上に堆く机下に充滿し。物として究  
 理せざるハなし。此項書肆錦橋堂。萬國人物志  
 の次編を乞ふ。依て倉卒に稿を脱し。本据を茲  
 童に知らしめんと。引書を挙て半楮を填げり

「本据を茲童に知らしめん」という姿勢からしても、この書の執筆が、単に興味本位の娯楽としてだけではなく、当時の庶民に有用な知識を与えようとの意図を含んで行われたことがわかる。また、後者『童繪解萬國噺』は四編八冊から成る合巻だが、初編の序文(「萬延二辛酉春」)には、次のような記述がある<sup>29)</sup>。

漢蘭の異文外藩の字音我童蒙婦女の爲に讀安からず。茲に於て。皇國假字に解和げ。萬里外の情景を諸書の中より拔翠して萬國話と号るものハ。春日秋夜の長きに倦の。御伽草紙といハまく而已

「御伽草紙」と割り切りながらも、そこには、有用な知識を「童蒙婦女」にも理解しやすい形で提供しようという啓蒙的な姿勢が見受けられる。内容は、初編冒頭に『萬國人物圖繪』と同じ体裁で、ロシア、イギリス、フランス、北アメリカ、オランダといった国々の簡単な解説が置かれ、その後、国ごとの地理や歴史などについての詳述が始まる。ただし、三編以降は、

此書の体裁や。例の稗史の顰に倣へど。萬言架空の話を設ず。蘭人葛拉墨兒氏が原譯たるを。清人の翻譯せし。海國圖志を始とし。其他増譯采覽異言。或ハ亞墨利加一統志。西洋襟記の諸書に原き。童蒙婦幼に見安くせんとて。皇國言葉を假名文に。解和らげし珍説異聞。

と記した三編序文(「文久改元辛酉季春」)<sup>30)</sup>にも関わらず、有用な知識を伝えようという実直な態度は薄れ、結局は合巻ならではの架空の物語へと展開してしまう。

この二作が刊行されたのは、安政六(一八五九)年に横浜・長崎・函館が正式に開港し、庶民が外国に対して多大な興味と関心を抱き始めた時期にあたる。魯文はそういった庶民の間の知識欲を当て込んだのだろうが、結局、この時には、有用な知識の提供という意識は一時的なもので終わり、以後の彼の著作は再び安定した江戸戯作の枠組みの中に戻ってしまうこととなる。しかし、明治五年五月の時点では、魯文を取り巻く状況は、江戸期とは大きく異なるものとなっていた。従来の戯作の枠組みは、決して安定したものではなくなり、戯作者はむしろ、新たな価値観を取り込まなければならない状況に直面していたのである。そして、その状況を魯文自身に改めて自覚させたのが、教部省からの指導であったと考えることができるのではないだろうか。

## 4

魯文たちが教部省への上申書の中で宣言した

「従来ノ作風」の「一變」とは、本質的には、〈無用〉から〈有用〉への転換を意味するものであったととらえることができる。彼らは社会的な有用性という点に自らの著述の将来を懸けたのであり、三条の教則に基づく魯文の著作も、そのような意識の中で実行されたと考えられる。

明治五年六月の刊行と見られる『首書繪入 世界都路』(全七巻)<sup>31)</sup>の第一巻冒頭に置かれた、四丁半にも及ぶ長大な「緒言」(「皇曆明治第五壬申年六月」)には、〈有用〉への転換に踏みきった魯文の、著述に対する新たな姿勢が具体的に示されている。

江湖上億萬の生徒。天工神作ならざるハなし  
と雖。學ばざるハ玉の琢ざるに等類く。赫耀  
發明の期有可からず。(中略)方今進歩の秋に當  
り。文運の期と雖。窮民子に學ばせざるの親あり。  
(中略)福澤先生茲に感ありて。前に世界  
國盡六巻を著されしより。纔に假字を知る而  
已の兒童輩をして。槩略地球上の景狀を解讀  
せしめ。大聲里耳を穿つの功業。將に闇夜の  
一燈と称すべし。就中僕が此編を作すや。  
原來諸譯書の糟粕にして。得意の俗文各地の  
名勝舊跡を修飾し。粗其國勢風俗を記載せる。  
敢て彼書に比較せんとの意に非ず。月ハ平原を  
照らすに宜しく。燈火ハ岐路を行に。便りなら  
んが如きを欲すればなり。抑譯書に二體あり。  
一を甲とし一を乙とす。其譯文。漢字と片  
假名を用ひ。傍訓に漢語と洋語を専ら兼用する  
者ハ甲人勤學の一助たる樞要の具にして。現今  
翻譯の体裁なり。其譯文。専ら俗字と國字を  
用ひ。傍訓に洋語俗語を以てする者ハ。(中略)  
則ち乙なり。其讀者をして難易の別あるも。  
其益に於けるや。都て甲乙有べからず。(中略)  
文章俗體を脱かれざるハ。乙の貧兒等の机上  
に備へ。同病相憐むの意を表するなり。

ここで魯文は、翻訳書には、「漢字と片假名を用ひ。傍訓に漢語と洋語を専ら兼用する者」と「専ら俗字と國字を用ひ。傍訓に洋語俗語を以てする者」との二つの形態があるが、両者には難易の区別はあっても、有益性という点では同じであることを述べ、自分自身は「窮民」「貧兒等」のために後者の著述を心掛けると宣言している。この姿勢は、『首書繪入 世界都路』の後に執筆された『通俗窮理話』においても、「其回話専ら俚語諺説を主とする者は則ち訓蒙の要務にして。更に文飾雅調に疎きは。編者が注意の基本なり」(前掲「自序」)として一貫しており、彼は、戯作で培ってきた俗文体を生かし、これまで学問から遠ざけられていた庶民のための有益な著作を行うことに、自らの針路を見出したのである。

こうした魯文の判断は、的確に当時の情勢をとらえていた。『首書繪入 世界都路』刊行の二か月後には、「人タルモノ誰カ學ハスシテ可ナランヤ」「邑ニ不學ノ戸ナク家ニ不學ノ人ナカラシメン」とする「學制」が發布され、日本でも近代的な学校教育制度が開始される。そして、この『首書繪入 世界都路』は、明治六年四月二十九日、文部省が布達第五十八号(「小學教科ノ書小學教則中ニ記載有之候得共右ハ只其概略ヲ示ス而已ニ有之追々各地開校ニ付テハ課業書不足ノ趣ニ付別紙目錄ノ書類相用可然候此段爲心得相違候也」)によって、「小學教則」(明治五年九月)に例示された教科書に追加を行った際には、「地理之部」にその名前が挙げられた。魯文の『首書繪入 世界都路』は、文部省によって教科書にふさわしい著作と判断されたのである。戯作者の著作では、このほかにも瓜生政和(梅亭金鷲)の『西洋新書』(初編から五編までの十冊が明治五年二月に刊行、その後、明治七年に六編二冊、明治八年に七編二冊を刊行)が、「小學教則」の中で下等第二級及び第一級の「讀本輪講」の教科書として挙げられている。梅亭金鷲の名で滑稽本や人情本を執筆した瓜生にも、この時期、魯文とほぼ同様の意識の変化が生じていたものと思われる。

しかし、戯作者たちが、〈実用〉〈有用〉〈有益〉

といった価値観を、その著述の方針に取り入れたことは、皮肉にも、彼ら自身を本来の戯作という領域から遠ざけてしまうことにもなった。これは考えてみれば当然のことではある。そもそも戯作とは、戯れによる著作の意であり、近世以来、勧善懲悪という道徳性を標榜してはいたものの、それはあくまで幕府からの禁圧を逃れるための名目であって、実際には、社会的な実用性や有用性といった価値観からは遠くかけ離れた存在であった。そして、そうであるが故に戯作は、社会的には蔑まれながらも、庶民の娯楽としての要素を十分に追求することができたのである。実用性や有用性を重視した著述へ向かうことは、すなわち、戯作から戯作の特性を奪い、戯作者が戯作者ではなくなることを意味する。実際、魯文について言えば、彼が明治六年二月に教部省に出仕し、『三則教の捷徑』を執筆したことは既に述べたが、その際に引用した谷川論文には、「三島は神奈川県参事に対し、当代屈指の人気戯作者であった仮名垣魯文（当時神奈川県職員兼務）を教部省へ約一週間出仕させ、「作文」させたいと申し入れた」とあった<sup>32)</sup>。「神奈川県職員兼務」とはどういうことなのか。この辺りの経緯については、魯文の弟子でもあった野崎左文が、聚芳閣版『萬國航海 西洋道中膝栗毛』（大正十五年刊）所収「西洋道中膝栗毛の末に一言す」の中で、次のように語っている<sup>33)</sup>。

魯文翁が中途『膝栗毛』の筆を絶ち、之を總生氏に譲つたのは、前にも記した通り明治六年の春である。夫まで翁は淺草地内寢釋迦堂の傍らに住つて居たとの事であるが、十二編の序を見ると魯文翁は是年横濱櫻木町七丁目へ移轉して居る、(中略) どういふ理由で翁が『膝栗毛』の作を中絶したかといふ事を追想して見ると、當時神奈川縣令たりし大江卓氏が、民情を視察させるには下情に通じた人を備ふに限るといふ見地から、山東直砥氏の紹介で魯文翁を神奈川縣廳の雇員に採用した、そこで翁は横濱に移轉し、年始と弔ひにも穿いた事のない袴を着け、腰辨

當で同縣廳へ通勤する事となつたので、公務多端……といふ程でもあるまいが……公職にある身分を憚つて、一時戲作に署名する事を廢したといふのが、『膝栗毛』著作中絶の原因では無からうか、併し後に聞けば翁は神奈川縣廳に在勤中、横濱毎日新聞の雜報記者となり、午前中は縣廳に勤務し午後よりは公々然として新聞社に來り、雜報の筆を把つて居たといふ事であるから、當時の役人生活の頗るのん氣であつた事も想ひやられるのである。

左文の述懐には、魯文が『萬國航海 西洋道中膝栗毛』の執筆を総生寛に譲ったのは「明治六年の春」とあるが、正しくは、同著十二編の冒頭に置かれた「西洋膝栗毛次編 依頼之記」の「紀元二千五百三十四年第一月」（明治七年一月）<sup>34)</sup>以てすべきであろう。また、「神奈川縣令たりし大江卓氏」とあるのについても、大江卓は正しくは神奈川縣権令とすべきである。このように、細部においては一部誤認もあるものの、「大江卓氏が、民情を視察させるには下情に通じた人を傭ふに限るといふ見地から、山東直砥氏の紹介で魯文翁を神奈川縣廳の雇員に採用した」という根幹の部分については、この通りであったと考えてよいのではなかろうか。ただし、魯文がこの職に就いた時期については、はっきりしない。『萬國航海 西洋道中膝栗毛』十二編の総生の手になる「自序」（「紀元二千五百三十三年九月」）には、<sup>とうとうついで</sup>「遂續て<sup>じういつへんそれハ</sup> <sup>きよねん</sup> <sup>とつぱじめ</sup> <sup>それからし</sup> <sup>こと</sup> <sup>ありつゝ</sup> <sup>くふにハ</sup> 十一編此は去歳の春正月也爾來官途に出身て生計<sup>こゝからか</sup> <sup>が</sup> 署定機會となり」とあり<sup>35)</sup>、魯文が明治五年一月の十一編刊行後に「官途」に就いたと記されている。また、先に引用した『通俗窮理話』の「自序」には、「明治第五壬申仲冬／金港寄留」と記載されていた。これらのことを踏まえると、魯文に「官途」の話が持ち上がったのは、おそらく、教部省への上申書が公表されてから、それほど日を経ない間のことだったのではないだろうか。実際に魯文がどのような仕事をしていたのかについては、野崎左文の『私の見た明治文壇』（昭和二年刊）の中に、<sup>けういく</sup>「教育の普及は計らん<sup>あきふ</sup> <sup>は</sup> <sup>た</sup> <sup>を</sup> <sup>う</sup> <sup>けん</sup> <sup>か</sup> <sup>じゆんくわい</sup> 爲め翁は縣下を巡回

し時には村民を集めて訓示演説をする事もあった」とある<sup>36)</sup>ことから、明治五年八月の「學制」發布を受け、学校教育の重要性を庶民に周知し、就学率を向上させるための活動を行うことが、主な任務だったのではないかと推測される。既に『首書繪入 世界都路』を刊行し、その「緒言」において、庶民のための有益な著述を宣言していた魯文は、このような任務に適当な人物と見込まれたのであろうが、左文の同著には、前述の部分に引き続き、次のような場面が記されている<sup>37)</sup>。

或る日或る驛で一場の演説を済ました後旅店に  
 投宿し、湯殿に至つて汗を流して居る折同じ湯  
 殿に居た客がひとりの連に向ひ「ナンと今日  
 巡回して來た役人は珍らしい名前ではないか」  
 と云へば連の人は答へて「アレを知らぬかアレ  
 は名高い戯作者だヨ」といふ「ム、さうか夫れ  
 で俺も思ひ出したが、併しそんな戯作をする人  
 が教育の説諭も可笑しい話だ、若し其人に子供  
 を托して教育でもさせたなら、大事な息子をあ  
 たら放蕩者に仕上げるだらう」と言ひ終つて始  
 めて魯翁のそこに居の心に心付き、是れは失敗し  
 たといふ風で跡をも見ずに逃出したが其言うた  
 人よりは片聞きをした魯文の方が赤面し、成程  
 これは適評だと大に我身を省みる所があつた  
 と、是れは魯文翁自らの物語であつた。

社会的な有益性という価値観を自らのものとした戯作者が、その結果として、当時の社会においてどのような状況に置かれることになったのかがわかる興味深い逸話である。魯文は、岡文紀『江湖機關西洋鑑』(明治六年十月「自叙」)初編の「序」、自著『文明捷徑 子寶習字章』(明治六年十二月刊)、『萬國航海 西洋道中膝栗毛』十二編掲載の「西洋膝栗毛次編依頼之記」(明治七年一月)、自著『佐賀電信録』(明治七年九月刊)の「小引」(明治七年六月十五日)、自著『現今支那事情』(明治八年二月刊)の「緒言」(明治七年十二月)において、名前を「神奈垣魯文」と表記している<sup>38)</sup>。もしかすると、前述のような出来事が影響してのこ

となのかもしれない。なお、魯文の場合はさらに、「神奈川縣廳に在勤中、横濱毎日新聞の雜報記者となり、午前中は縣廳に勤務し午後よりは公々然として新聞社に來り、雜報の筆を把つて居た」<sup>39)</sup>ということである。これも、魯文がいつから『横濱毎日新聞』の仕事を始めたのかについては特定することができないのだが、既に条野が『東京日日新聞』に活動の中心を移したのと同様、実用性や有益性を要望する時代の波に乗っての動きであつたことには間違いない。彼らはこれまでに培った戯作の筆を、役人、教育者、あるいは記者といった、社会的に有用とされる立場で生かすこととなつたのである。

(次号に続く)

## 【注】

- 1) 三川智央「明治初期の戯作の動向(Ⅰ)―仮名垣魯文・条野伝平による教部省への上申書をめぐる考察―」(金沢大学大学院人間社会環境研究科『人間社会環境研究』第二十四号、平成二十四年九月)。
- 2) 注1の拙稿「明治初期の戯作の動向(Ⅰ)―仮名垣魯文・条野伝平による教部省への上申書をめぐる考察―」を参照。
- 3) 注2に同じ。
- 4) 柳田泉『明治初期の文学思想』上巻(春秋社、昭和四十年三月)。
- 5) 山田俊治「『小説』の十九世紀」(岩波書店『文学』隔月刊第十卷第六号、平成二十一年十一月)。
- 6) 小笠原正道『大教院の研究―明治初期宗教行政の展開と挫折』(慶應義塾大学出版会、平成十六年八月)。
- 7) 注6に同じ。
- 8) 三宅守常編『三条教則衍義書資料集』下巻(明治聖徳記念学会、平成十九年七月)所収の「解題」に拠る。
- 9) 表紙裏には「神武天皇紀元二千五百三十三年／三條演義／官許 中西源八藏版」とあり、田中頼庸による「序」には「神武天皇紀元二千五百三十三年四月七日」、「龍田神社大宮司兼大講義大澤清臣」による「跋」には、「明治六年四月十日」と日付が記

- されている（国文学研究資料館「近代書誌データベース」所収の市立米沢図書館蔵本の調査画像に拠る）。なお、本書からの引用は、三宅守常編『三条教則衍義書資料集』上巻（明治聖徳記念学会、平成十九年七月）所収の『三條演義』（翻刻）に拠った。
- 10) 本書からの引用は、国文学研究資料館蔵本（国文学研究資料館『リプリント日本近代文学 三則教の捷徑』平成十九年三月）に拠った。
- 11) 注4に同じ。
- 12) 注2に同じ。
- 13) 口絵裏の扉部分に「魚説教第壹／明治五年申六月／書典存誠閣發兌」とある（早稲田大学図書館古典籍総合データベース所蔵本）。
- 14) 谷川稷「教部省教化政策の転回と挫折―「教育と宗教の分離」を中心として―」（史学研究会『史林』第八十三巻第六号、平成十二年十一月）。
- 15) 佐波亘『植村正久と其の時代』第二巻（教文館、昭和十三年二月）。
- 16) 『三則教の捷徑』は注10と同じ国文学研究資料館蔵本、『三條演義』は注9と同じ市立米沢図書館蔵本で確認。
- 17) 注10と同じ国文学研究資料館蔵本で確認。
- 18) 注2に同じ。
- 19) 注2に同じ。
- 20) 注2に同じ。
- 21) 注2に同じ。
- 22) 慶應義塾図書館デジタルギャラリーの解説は、明治十三年に刊行された合本の序に「本編は余が読書の余暇随時に記す所にして、明治五年二月第一編を初として、同九年十一月第十七編を以て終り」と記されていることから、初編は明治五年二月刊行としている。なお、本書からの引用は、慶應義塾図書館デジタルギャラリー所蔵の初版本と思われる「清朝体活字本」（刊行年月の記載なし）に拠った。
- 23) 引用は、早稲田大学図書館古典籍総合データベース所蔵本に拠った。
- 24) 注23に同じ。
- 25) 初編に刊行年月の記載は見あたらないが、興津要は、『転換期の文学―江戸から明治へ―』（早稲田大学出版部、昭和三十五年十一月）所収の「幕末・開化期 戯作略年表」で、初編の刊行を明治五年一月としている。なお、本書からの引用は、早稲田大学図書館古典籍総合データベース所蔵本に拠った。
- 26) 注23に同じ。
- 27) 引用は、国文学研究資料館「近代書誌データベース」所収の神奈川県立図書館蔵本の調査画像に拠った。
- 28) 引用は、神奈川近代文学館蔵本（國學院大學仮名垣魯文研究会編『幕末・開化期文学資料集 仮名垣魯文 二』平成二十二年三月）に拠った。
- 29) 注23に同じ。
- 30) 注23に同じ。
- 31) 第三巻と第七巻の奥付には、「明治五年壬申仲夏／回春樓蔵」とあるが、第一巻の「緒言」が「皇曆明治第五壬申年六月」に記されていることから、刊行は明治五年六月にずれ込んだと見てよいだろう。興津要も、『転換期の文学―江戸から明治へ―』（前出）の本文中で、「『首書絵入 世界都路』（七冊・五年六月刊）」としている。なお、本書からの引用は架蔵本に拠った。
- 32) 注14に同じ。
- 33) 野崎左文「西洋道中膝栗毛の末に一言す」（『萬國航海 西洋道中膝栗毛』聚芳閣、大正十五年三月）。引用は架蔵本に拠った。
- 34) 注23に同じ。
- 35) 注23に同じ。
- 36) 野崎左文『私の見た明治文壇』（春陽堂、昭和二年五月）。引用は架蔵本に拠った。
- 37) 注36に同じ。
- 38) 『江湖機關西洋鑑』、『文明捷徑 子寶習字章』、『萬國航海 西洋道中膝栗毛』、『佐賀電信録』については、早稲田大学図書館古典籍総合データベース所蔵本で確認。『現今支那事情』については、国会図書館近代デジタルライブラリー所蔵本で確認。
- 39) 注36に同じ。